

本稿は単立千里山基督教教会のご承認を得て、柿崎眞吾様を偲びつつ謹んで掲載させて頂きます。掲載に当たり千里山在住同教会員二十四回生奥田(細見)洋子様(本会会友)に資料提供、教会へのご説明など大変お世話になりました。

2008年10月5日

千里山訪問記

柿崎眞吾



真だけでなく、自分の足でシオンの丘に登り、この目で建物を拝見して礼拝に出席したいものと、かねがね思っていた次第のことでした。

初秋の晴れ渡った当日、早朝に新大阪駅に着き、阪急で千里山へ、一人懐かしさと感慨に耽りながら教会の坂を登りつめると、鮮やかな緑の芝生が私を歓迎してくれました。

八月の残暑がまだ厳しい或る日、平田坦兄から「千里山教会の六十周年記念礼拝に行きませんか？」とお誘いがあり、いつかはお訪ねしたいと思っていましたので「参ります」とお返事しました。

受付で、吉川清和先生と初めてご挨拶させていただきました。木材を基調にした落ち着きと温かみのある礼拝堂が、先程の芝生とともにほかに見られない来会者への配慮が感じられて、ふと昭和二十五年に近江八幡のヴォーリズ建築事務所へ先輩を訪ねたことを思い浮かべました。

2008年10月5日

図らずも、私のまとめました文章が教会六十周年記念誌に転載されることになりましたが、それは多くの方々のご協力があつたからのことでした。東京の地に在つて、千里山教会の門を潜つたことのない者が、写

聖壇に向かつて黙礼し左後の座席に座ろうとするとバツタリ森田千里兄と出会い、「いやーしばらく…」と話しかけようとしたら、「聖歌隊や

さかい」と言われる。そのうち正面右に白い制服を着ている兄の姿にまたびつくり、礼拝前にキョロキョロできないのでそれとなく知った方はと目だけで追っていると、お名前は出ないけれど、なんと六〇七十年前の幼顔を残しておられる方が二、三人おられるではありませんか。そのうち河津慶三兄が入ってきて前方に座るのを見てホツとしました。

奏楽から始まり、山内一郎先生のお話を中心に、ハンドベルの方々、聖歌隊の方々、関学グリーOBの方々のご奉仕と、六十周年記念に相応しい進行が続き後奏が終わつて、初めての参会者の私を吉川先生がご丁寧に紹介してくださり恐縮しました。

兄がやって来られ、皆でコーヒーを飲みながら楽しいひとときを過ごさせていただきました。



散会後は、会誌転載の仲立ちをしてくださった奥田洋子姉が浦晴子姉と敷地内を案内してくださり、さらに車で、平田兄と私が同乗し千里山の住宅地内を細かく案内してくださつて、変わらない道筋に懐かしさが湧いてきました。戦後の関西大学を知らない私に素晴らしいキャンパスも見せてくださいました。途中松ヶ丘という町名に、この辺りが今はそういう町名かとあらためて起伏のある素敵な住宅地を眺めていると、一気に七十年前のことが甦ってきました。それは昨年急逝した千二小の私達の学年幹事で、かつて大学前に住んでいた岡村吉純君がいつも子供の頃案内してくれた笹の生えた小丘陵(笹山)がこの辺りだったのです。

その頃の腕白坊主の遊び方を紹介しましょう。

仲間の五、六人のうちの誰かの家から奥座(こくら)を一枚持ち出し、笹で覆われた山に登る。全員これに乗り、前の二人が奥座を胸までまくつて固く握り締める。滑りはじめは笹が立っているので超入りだが、二、三回もやるとうちに笹が次第に寝はじめ適度のスピードになり愉しくなってくる。そこに繰り返すとすかさず笹が寝て猛スピードになるので、スリル満点となる。平地に着いたときは四散するように投げ出され、誰彼となく満足感で顔を見合わせては大口を空いて笑つのが堪らなく愉しい。



遊びに出るのも制服の着た切り雀だから傷み方もひどく、いま思えば母親泣かせの遊びでした。どの起伏が笹山だったかは知るよしもありません。

線路を渡り昔の水道ポンプの前を通り、坂を登つて旧郊外学園から緑地公園まで二人を送っていただき、新大阪駅へと帰路に就きました。心からお二方のご厚情に感謝いたします。

この度の教会訪問には、創立六十年のお祝い訪問と、もうひとつの目的がありました。

三十二年前の昭和五十一年六月のこと、福島に転勤したばかりの私に小包が届きました。海老茶色の表紙の分厚い旧新約聖書で、裏表紙の内側に「受洗を記念して」とあり千里山の七十六歳の母からのものでした。

驚いたのは無理ありません。母は言葉少ない性でしたが、それにしてもかつて基督教や聖書の話は母から聞いたことはなかったのです。よく決心してくれたと嬉しさが込み上げてきたのは確かです。
森大牧師に感謝しております。

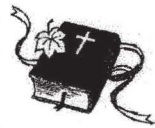


教会訪問のもう一つの目的とは、三十二年前母が千里山教会でどんな様子で洗礼を授かったのだろう、きつと七十六年の重荷を降ろして晴れ晴れとした、私が見たことが無い顔をしていたに違いありません。その聖壇と礼拝堂をぜひ見ておきたいとの願いを果たすことでした。

母は受洗の三カ月後に脳梗塞で倒れ七年前の療養生活に入り、昭和五十八年三月に天に召されました。私はその間、福島から広島を経て東京に移っておりました。いよいよ危ないと言き、東京から猪名川の老人病院に駆けつけたときは、目は開いたまま天上を見つめて私が声を掛けても気が付く様子はなく、全く反応はありませんでした。ふと母が口を僅かに動かしているのに気が付き、急いで耳を近づけると、とても小さい声ながら聞こえた言葉は、
「天のお父さま」
の一言でした。それは私が、母が洗礼を受けたとき以上の衝撃でした。はじめて母の口から基督教の言葉を聞いたからです。咄嗟のことでしたので、「主の祈り」のはじまり？ それとも三十年前に召された父のこと？ いやどうもそうではない・・・そのうち思い当たったのは、母がカトリックのミッション・スクールを出ていたことでした。四谷の雙葉女

学校で入学から卒業までミサも出席しシスターの導きで「天のお父さま」を誦えたはずで、女学校の時の聖堂の夢を見ているに違いないと、やっと正解を得た気持ちになりました。まもなく召されていった母は幸せだったと思います。

いまは（臨終）のときは、大神学者でも母のような信者でも、分厚い旧新約聖書の中のほんの聖句の一言、何百とある讃美歌のほんの一小節しか誦えたり歌えたりできないと知り、それが出来る人は幸いなるかなと痛感しました。



私が受洗したのは、母が聖書を送ってくれて三年後、福島の最後の年で四十八歳でした。教会へは中学四年のとき一年間、それから飛んで大学一年の時の一年間、その後二十五

年間教会からは遠のいていました。黒い皮表紙の文語体旧新約しか知らなかったのですから口語体は読みやすく、年齢的に最も多忙な頃でしたが、粗いながら念願の通読ができました。その秋に上京し、大学一年のときに通った教会の牧師にお願いして洗礼を授かり、いつの間にか三十二年が経ちました。

下段の讃美歌は明治初期に到来した最初の讃美歌集にあるもので、植村正久が訳したもの、島崎藤村の替え歌も有名のようです。



柿崎眞吾 様

千里山のお生まれで、青年期から東京にお住いになっていきます。日本基督教団弓町本郷教会会員です。千里第一小学校東京同窓会の会誌（千里山）の、昨年10号まで編集人をしておられました。
ご両親は千里山教会員として晩年を過ごされました。



- 一、ゆづりくしづかにいのりせんとてよのわづらひよりしげいのなる
- 二、かみよりはかたはまゝしものなき木かげにひれしフクをいぬ
- 三、すがししのくみをおもひでけいよよゆくすゑのよらとぞねがふ
- 四、うれいむちみむ わがみかたにまかすることや よつとびとせん
- 五、身にしみわたれる ゆづりくしづきのえならぬけしきをいかやわすれん
- 六、このよのつめのとばらんきの日いまはのてまにもかしくあらん

「新撰讃美歌」第四 礼拝夕

しおんの丘 19号
なお、千里山基督教会六十周年記念誌に柿崎様が千里山会誌10号に寄せられた「河邊貞吉氏の生涯をたどる」が転載されており、ここではご紹介のみに留め、興味ある方は会誌10号をお読み頂きますようお願い致します。